

カメレオンノート

作・
山口香織

登場人物・

男（ヒロ）　　ネガティブ、落ち込みやすい性格。

女（ユウ）　　ポジティブ、明るく優しく朗らかな人格。

あらすじ・

1 図書館に残されていた一冊のノート。男が失くし、女が見つける。少しの好奇心と悪戯心。「カメレオンの音を知っていますか？」そんな言葉から始まったノート上での交流で、二人の心は近づいていく。近づいた先に見える景色。それは――

「」や『』で囲われている箇所はノートに書かれている。

明転。スポットがつく。

ノートが舞台中央につるされている。

男、手紙を持って登場し、ノートに手紙を隠す。

以降、流れに合わせノートを手に取ったり、吊るしたり、照明の変化で中心となる人物が切り替わる。

男・女

「カメレオンの音を知っていますか？」

1

町はずれの図書館。いつも誰もいない。定期的に並んだ席の一番奥、窓際に座るのが僕の定位置。そこに、どこかで失くしたはずのノートが置かれていた。ノートを開くと、ミミズみたいな僕の文字の脇に、誰かの書き込みが添えられていた。丸くて可愛い文字。匂い立つような文字。ノートから甘い香りが漂った。誰かからの手書きの文字を見るのは久しぶりで、夕方の暖かな光の中、僕の汚い文字すらも輝いて見えた。ノートをその席に置いたまま帰ったのは、ただなんとなく。僕の部屋に持ち帰るにはノートが暖かったから。

「ノートを見つけてくれて、ありがとうございます。でも、カメレオンの音ってどういうことですか？」

「勝手にすみません。置いてあったから、つい読んじゃいました。この童話、凄く面白いですね！例えば、ワンワン、ニャーニャーとか音を書いてあると、もっと楽しくなるかなって思いました。私はこの話好きです。」

女

カメレオンの鳴き声。…カメレオンって鳴くのかな？

「確かにそういうのがあると、もっと童話っぽくなりますね。参考にします。」

男

女

「喜んでもらえるといいですね、子どもたちに。」

男

…喜んでもらう…か…

「これは、誰かのための物語ではないんです。童話とか子どものためとか、そういうのじゃなくて、ただ思いついたまま書きなぐってました。だから誰かに見せる予定もなくて。でもこうして読んで貰えて、褒めて貰えるって、こんなに嬉しいものなんです。知りませんでした。本当に嬉しいです。ありがとうございます。」

女

「勿体ないですよ！ せっかく書いているのに。完成させて、みんなに見て貰いましょうよ。どこかに応募してみたら、どうですか？ 童話や絵本のコンクールとか。この物語だったら、絵本が似合いそうですよね。探してみましようよ。」

男

「応募なんて恐れ多い！ 本当に暇つぶしで書いただけなので、僕なんかの作品なんて送っても…。別に作家を目指している訳ではないですし、なれるなんて思っていないし。こうして読んで貰えたのも、僕にとっては奇跡みたいなことなんです。」

女

「私だったら書けないです。読む専門です。普通でしょう？ 書こうと思えるのが凄いことですよ、本当に。それに、このお話はちゃんと面白いから、自信を持ってください。どこか淋しさがあって、それでも諦めきれない優しさがある。きっと人柄なんでしょうね。」

男

「こんな頻度で図書館に来て、一人で物語を書いているようなヤツですよ。こんな、わざわざ人がいない図書館を選んで来るような。ここは、いつも起きているのか寝ているのか分からないお年寄りばかりだから落ち着きます。根暗ですよ。」

女

「私もです。いつもここに来ています。勿論、にぎやかな場所も好きです。けど、たまに静かになりたいときもありますよ。」

男

ね。…きつと同じですよ。私とあなたは。」

僕と、同じ…？

「ありがとうございます。嘘でもそう言って貰えると嬉しいですよ。」

女

「嘘じゃないですよ！ 本当です。ここは逃げ場所なんです。最近嫌なことがあって、誰かと一緒にいるのは疲れちゃうけど、一人ぼっちは嫌。そんな時、私は逃げ込んでいます。ここは、ちょうどいいから。」

男

そっか。僕と同じなんだ。

「引きこもることに飽きちゃって、誰かに見つけてほしくて、ここに来ています。自分から声をかけるなんて出来ないくせに。声を上げるなんて、出来ないくせに。」

女

見つけたのは一冊のノートだった。そのノートには、物語が書かれていた。何回も消しゴムをかけた跡があって、何回も頭から書き直されていたそのお話からは、書いた人の淋しさがにじみ出ていた。誰の声も聞こえない図書館で、悲鳴が聞こえた気がした。どこまでも静かに響いて、誰にも気づかれないまま消えていく。このまま落とす物として預けてしてしまうのは、悲しい声が耳に残りすぎた。もっと楽しい音で囲まれてほしいと、そう思った。

「ちゃんと聞こえましたよ。」

…カメレオンが泣くのか、知らないけど。私には届いてしまったから。

聞こえてたんだ…、僕の声。

「面白い物語が書ける自信はないです。どうなるのか、応募するかも分からないけど、また読んで貰えると嬉しいです。」

（呼吸を整える。）「それに、よかったら、もし、本当によかったら、あなたの名前を教えてくださいませんか？ 僕はあなたの名前を呼びたい。ヒロより。」

女

…あなたは、どんな人なんだろう。

カチツ。鍵が開く音が聞こえた。私だけが気づいた、私だけの音。薄く扉を開いて、私にだけ顔を見せてくれた。私なら、きつと理解者になってあげられる。きつと毛布で包み込むように、もつと優しい世界を見せてあげられる。周りの人よりも、もつと。ずつと。可哀相で、可愛い人。…哀れな人。

「楽しみにしています！ 私に、もつと貴方のことを教えてください。きつと私たち、もつと仲良くなれると思います。私の名前は…、ユウ。ユウと呼んでください。」
ああ…、あなたはどんな人なんだろう。

2

男、書いている童話を読む。

女、背後でお絵かきをして遊んでいる。

『ここは町です。ちいさな町です。丘を超えた、森の先にある、ちいさな町で、動物たちが暮らしています。たくさんのお店があります。何でもあります。花屋さん、ケーキ屋さん、お洋服だつて売っています。色とりどりに、何でもあります。』

女、書き上げたカメレオンの絵を中央に吊るす。

『ある日、町にカメレオンがやって来ました。カメレオンの旅人は初めてでした。皆は興味津々です。子犬が聞きました。『色を変えられるって本当？』

カメレオンは答えません。子猫がお願いしました。

男

「ねえねえ、変えて見せてよ。」
カメレオンは動きません。このカメレオンは色を変えることが出来なくて、村から逃げてきたのです。だから、カメレオンは元の汚い緑色のまま。』
ままで…、…どうしたらいいんだろう。
ノートの交換に戻る。

「ユウさん、カメレオンのイラスト、ありがとうございます。素敵です。僕は絵心がないので、羨ましいです。この前、カメレオンについて調べてみました。題材にしてみたけど、よく知りませんでした。目がぎよろつとしていて、意外とじつくり見ると可愛いですね。虫を食べるイメージでしたけど、リンゴを食べる種類もいるそうです。」

男

「ユウさん、こんにちは。アップルパイが作れるの凄いですね。僕も食べてみたいな。教えてもらったバンド聞きました。カメレオンの歌があるんですね。初めて聞きました。夏フェスに出るのも決まったとか。ユウさんは行きますか？僕は暑い所も人が多い所も、ちよつと苦手です。僕が好きな曲も、好きになつてもらえると嬉しいですよ。ピアノが美しい曲だから。」

男

「物語の続き、頑張つて書かなきゃって思っていますが、全然思いつきません。ユウさんは、どんな物語が好きですか？」

女

「ヒロさん、ありがとうございます。イラスト、気に入ってもらえて嬉しいです。そんなに褒めてくれる人、初めてですよ。カメレオンがリンゴを食べるって知りませんでした。私もリンゴ好きだから、なんとなく嬉しいですよ。特にくたくたに煮たリンゴのアップルパイが一番好き。手作りのアップルパイ。私もよく作るんですよ。」

女

「ヒロさん、バンドの曲を気に入って貰えて嬉しい。私も夏フェスは行ったことないですよ。大きい音がちよつと怖くて。ヒロさんの好きな曲、聞けてません。ごめんなさい。ピアノの音は…、ちよつと怖い。」

女

「ヒロさん、書けない時は美味しいもの食べて、気分転換しましょう！ 散歩とか、映画を見たりとか。どんな物語が好きか。そうですね…、とびつきり幸せな話がいい。ハッピーエンド。私は悲しい話とか辛い話は絶対見たくない。誰も不幸にならない話がいい。」

男、書いていた童話を読む。

女の手元に手紙が渡り、手紙を読んでもしまう。怯え、戸惑う。

男

『カメレオンはゴミ捨て場に隠れました。カメレオンは「ワルイコト」をしていないのに、怖い敵が追いかけてきたのです。見つからないように、音をたてないように。ずっと動かずに、息をひそめて、ずっと隠れていたら、ある日色が変わらなくなっていました。ゴミの色。汚い身体。汚い色。汚い、汚い、汚い、汚い！ 怖い敵がいなくなっても、ずっと汚い色のまま。鮮やかな空の青も、燃えるような夕日の色も、眩しく光る雪の色も、真似することが出来ません。他のカメレオンはどんな色にもなれるのに。赤・青・黄色。虹色にだってなれるのに。カメレオンは、ばかにされて、悲しくて、寂しくて、誰かに助けてもらいたいのに、誰も助けしてくれないから！ だから、ある日本当に「ワルイコト」をしてしまいました。』

……カメレオンは「ワルイ子」だから。だから、いつもひとりぼっち。

女、消える。

男

「ユウさん、カメレオンの物語、続きを書きました。でも結末に悩んでいます。お返事待っています。」
「ユウさん、最近お忙しいんですか？ 無理をしないでください。お返事、待っています。」
「ユウさん、ごめんなさい。僕が何か不愉快にすることを書いてしまいましたか？」
「ユウさん」「ユウさん」「ユウさん」……

男

「……ユウさんは、ハッピーエンドが好きなんですよね？ 続きがずっと書けていません。僕だけだったら、どんな結末でも好きに書いていいと思っていました。僕一人だったら、バッドエンドでも全然かまわなかったのに。でも、ユウさんが楽しみにしてくれてると思うと、そう思うとハッピーエンドを書かないとダメかなって……いや、書きたいなって思いました。でも、やっぱり分かりません。どうやったらハッピーエンドになるんでしょうか？ カメレオンの幸せって何ですか……？ 僕だけだと書けないんです。ユウさん、戻って来てください。」

女、戻る。

女

「ヒロさん、ごめんなさい。体調が悪くて、ずっと寝込んでいました。心配かけて本当にごめんなさい。」

「ヒロさん。お話の続き、読みました。とても、悲しい気持ち伝わってきました。」

「ヒロさん、本当にごめんなさい。」

「ウソ。この前ウソをつきました。最近ずっと寝てしまうことがあるんです。朝になっても、夜になっても、次の日になっても、どれだけ目覚ましをセットしても、全然起ききれなくて。一人だから誰にも起こしてもらえない。……普通じゃないですよね。」

「ヒロさん、ごめんなさい。嫌われちゃったかな。」

男

「ユウさん、そんなことないです！ だったら僕の方が『ワルイ子』ですよ。僕はいつも兄に叱られて、いじめられてばかりでした。両親も出て行ってしまって、もうほとんど顔を合わせていません。嫌われてしまっているようです。」

女

「ヒロさんみたいな兄弟が欲しかったな。静かで優しくそうですよね。私だったら絶対に大切にするのに。」

男

「……ユウさんみたいに明るい素敵な人だったら、捨てられなかったのかな。」

女

「ホント、褒めてくれるのはヒロさんだけです。ヒロさん。もし嫌じゃなかったら、今度お会いしてみませんか？」

男

「そんな、嫌だなんてとんでもない！ 僕もユウさんにお会いしたい。ちゃんとお礼を伝えたいです。今度の日曜日、10時に図書館でお待ちしています。10時に来なくても、ずっと待っています。真っ白い服を着て座っています。僕を見つけてください。」

女

「ヒロさん、必ず見つけます。私は真っ黒な服を着ていきます。必ず行きます。」

男・女

でも、会えませんでした。

男

日曜日、ユウさんは現れませんでした。朝から晩まで、ずっと座ったまま。誰もこない部屋で、僕はずっとひとりぼっち。

女

またやってしまった！ 気が付いたら、約束の日はとつと昨日。テレビからは朝のニュース。今日から一週間、頑張りましょう！ 頑張るって何を？ 頑張りたい一日はチャンネルを変えるみたいに消えてしまった。もういないなんてことは分かっている。それでも、もしかしたら今日も来てくれるかもしれない。もしかしたらの一心で朝一の図書館へ駆け込んだ。爽やかな空気の部屋には、昨日を見失った私だけがひとりぼっち。誰もいない。何も無い。

…私が理解者になってあげるなんて、何様だったんだろう。ノートもない。約束もない。どうしてこうなっちゃったんだろう。……私が、「ワルイ子」だから……？

女、消える。

3

男

男、ひとりぼっち。

ユウさんと会えなかった日から、ノートは僕の手元のまま。仕方なかったんだ。本当に？ 嫌われた？ 違う、きっとそうじゃないかもしれない。次の日にはユウさんも来てくれたかもしれない。でも、答えは分からない。またこの前みたいに、戻って来てくれるかも。でも来ないかも？ 知りたくない。知りたくなんてない。こんな時ユウさんならどうする？ 笑い飛ばすのかな。それとも…

朝、図書館につく。ノートには、まだなんて書いていたらいいか分からない。また置いていたらユウさんが見つけてくれるかもしれない。かもしれないにすがっていれば、僕はまだ息が出来る。けど「かもしれない」にすがらんじゃなくて、「かもしれない」を信じてみたい。きっとユウさんなら、そうするから。もう一日だけ、もう一日だけ！

(男、周囲を見回し誰かを待つ仕草が入るが、誰も来ない。)

…ほら、やっぱりそうだったじゃないか…、元に戻っただけ。ノートを失くす前に。誰も僕の名前を呼ばない。世界にひとりぼっち。

男、童話を書こうとするが、続きを書けない。

男

『カメレオンは胸をはりました。なんと旅をしてる間に忍者に出会って、色を自由自在に変えられるようになったのです！』
違う。

『カメレオンは洋服屋さんになって、色々な洋服を作りました。変身できなくても、みんなで自由な色を楽しめるようにしたのです！』
違う。

『カメレオンは泣き出してしまいました。泣いたカメレオンをみんなどうしたらいいのかわからず、遠くから見守るしかありませんでした。』

女 男 男 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

…違う!! こんなんじゃない。こんなんじゃないんだ……。じゃあ、どんななんだ…

どこかから、繰り返しの女の声が聞こえてくる。

「ヒロさん。」

気が付くとノートに文字が増えている。丸くて可愛い文字。匂い立つような文字。

「ヒロさん。」

文字は次々に増えていく。

「ヒロさん。」

ユウ…さん?

「なんで悲しい話にしちゃうの? 私はハッピーエンドがいい。」

「だってユウさんがいないから…」

いや、そうじゃない。どうして…? ノートはここにあるのに。僕の部屋に。僕の机の上に。

「違う。ノートはここにあるよ。私の部屋に。私の机の上に。」

えっ?

「えっ?」

ノートに文字が増えていく。

「鏡」

僕は部屋の外へ出る。大きな鏡があるのは二階に続く階段の上。誰も使わない家族の部屋の前。…甘い香りがする。いつも

ノートからする香り。ユウさんの香り。アップルパイの匂い。

「鏡を見て!」

男、鏡を覗き込む。その向こう側には女がいる。

男・女
男
男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
男・女

：あなたは誰？

鏡には僕が居ない。

私が居ない。

これは誰？

鏡に写っているのはユウさんだ。

僕じゃない。

僕が思い描いていたユウさんの顔。

私は誰？

これは私？

誰も居ないのに声が聞こえる。

私しかないのに。

聞こえてくるのはヒロさんの声。

私じゃない。

私が思い描いていたヒロさんの声。

これは何？

僕は僕じゃなかった。

僕たちは…？

：お兄ちゃん？
え？

私に兄弟なんていない！

…ほんとうに？

…お兄ちゃんはいつもピアノを弾いていた。

コンクールで優勝してお母さんが喜んだ。

お兄ちゃんは私の絵を破って遊ぶ。

お母さんはいつも見て見ぬふり。

アップルパイを作るときだけ、私を見てくれた。

その時だけだった。

お兄ちゃんは、いつも、酷いことをする。

あの日もそうだった。

だから私は暴れた！

階段の上で。この鏡の前で。

お兄ちゃんは、ぎよろつとした目で落ちて行った。まるで…、カメレオンみたいな目。

鈍い音が響いた。

血が広がる。赤い。白いシャツが染まる。お母さんが来た。カメレオンの目で私を見上げる。

…私は「ワルイ子」だ。

違う。

私は悪くない。

僕が「ワルイ子」だ。

思い出したくなかった！ お兄ちゃんを殺したのも、親に捨てられたのも私？ …あなたじゃない。こんな記憶いらない。

あれは私じゃない。僕は違う。私は汚い…、普通じゃない…

男、混乱し暴れる女を毛布のように包み込む。

問。

ねえ、カメレオンの音は知ってる？

…え？

カメレオンは鳴かない。ウソ。威嚇するときだけ、ちよつと音を出す。動くときもそんなに音を出さない。絵本向きじゃないですね。

調べたの？

ユウさんが、書いてつて言ったじゃないですか。

うん。

僕は知っています。ユウさんは、社交的で明るくて前向きだ。けど、ちよつとだけめんどくさい人。それにアップルパイが好き。アップルパイを焼いているときはお兄ちゃんが来ないから。

匂いが嫌いなんだって。

そして、絵が上手。ピアノは弾けない。

お兄ちゃんとは、全然違う。

違う。僕はお兄ちゃんじゃない。

…

僕は、ヒロです。

…ヒロさん…？

呼んで、僕の名前。

ヒロ。

お兄ちゃんは死んでないよ。

え？

僕は知っています。お兄ちゃんは死ななかった。死に損なつた！でも手は壊した。お兄ちゃんの手を治すために遠くへ行

った。お母さんは私を捨てた。

だから、私も記憶を捨てた。でも捨てきれなかった。

(手紙を取り出す。)お母さんからの手紙。『お兄ちゃんがまたピアノを弾けるようになりました。帰ります。許してあげるから、許してあげなさい。』お母さんは私を見ない。

お母さんに声は届かない。

お兄ちゃんは帰ってくる。だから僕はお兄ちゃんじゃない。僕はアップルパイ、好きです。食べてみたいな、ユウの手作りの。

でもピアノの曲好きだった。

うん。本当はお兄ちゃんのピアノも大好きだった。白と黒の鍵盤から、あんなに色づいた音が流れてくる。音で塗り絵をしているみたいに世界がきらめく。

…うん。それにピアノの音がしてるときだけは痛くない。

同じだけど、違うね。

私も知ってるよ。ヒロは、ネガティブですぐに落ち込む。引っ込み事案で全然外に出ない。でも、物語を作ることが得意。

お兄ちゃんと違う？

私とも、全然違う。

けど、おんなじだ。何かを作ることが好きで、本当はいつか、幸せになりたい。

ずっと、誰かが欲しかった。手を握っていてくれる毛布みたいな人。

ねえ、逃げようか。カメレオンみたいに、僕たちを知らない町へ。色とりどりの町へ。

怖い敵に見つからないように？

…そう。そして絵を描いてよ。カメレオンの絵。君の色と僕の色のカメレオン。あの物語を完成させましょう。

ひとりぼっちで？

違う。僕たち、ふたりぼっちで。

…結末は決まったの？

男 女 男
二人

決まっています。やっぱりバッドエンドになるかも。

ハッピーエンドがいい。とびっきりで無敵の、ハッピーエンド。

うん、僕もハッピーエンドがいい。だから、一緒に作ろう。

『僕／私のために物語を。』

二人、手を取り合い、消える。

了

この作品はフィクションです。実在の人物・団体とは関係ありません。

この戯曲の著作権は作者に属します。

上演等希望の場合は、作者「Kao_yg0924@yahoo.co.jp」までご連絡ください。